一般論文

障がいのある子どもの長期休暇支援に関する一考察

―母子グループＪの事例検討を通して―

A Study of Support for Children with Disabilities during Long Holidays

―The Case Study of Group “J”―

數　野　　歩，山　内　淳　子
Ayumi Kazuno，Junko Yamauchi

概　要

本研究では，Ｙ県Ｋ市にある，障がいのある子ども11名とその母親11名で構成される母子グループＪ（以下，J）で行われている「障がいのある子どもの長期休暇支援活動」の特長と課題についてインタビュー等を通して明らかにすることを目的とした。Ｊの活動はその誕生から25年にもわたって続けられていた。それを可能としていたのは，行政からの支援とその組織体制であった。Ｊは「障がいのある子ども・母親・きょうだい児・ボランティアの四者参加型」の形態をとっていた。障がいのある子どもにとってＪは，「家族以外の第三者と人間関係を広げられる場」「楽しい活動の場」となっていた。母親にとってＪは，「母親同士の交流を深められる場」「休息・育児負担軽減の場」，家に引きこもりがちな長期休暇中に「楽しく外出できる先」，「きょうだいへの子育てを支援してくれる場」となっていた。学生ボランティアにとってＪは，「障がい児およびその家族への理解が深まる貴重な学びの場」となっていた。他方，「療育活動の導入」「施設外での活動の一層の充実」「年齢があがっても参加できる活動の工夫」「障がいの違いに配慮された活動の一層の充実」「ボランティアの確保」「送迎負担の軽減」「活動の普及」「母親参加型を維持しながらの母親負担の一層の軽減」「学生ボランティアが子ども同士の関係をつなぐ役割を担っていくこと」といった課題も認められた。

Ⅰ　研究の目的

「障がいのある子どもの放課後・休日支援」は，「障がいのある子どもの生活や発達を豊かにすること」「保護者の育児負担を軽減すること」「保護者の就労を保障すること」さらには，「障がいのある子どものきょうだい（以下，きょうだい児）に対する保護者の子育てを助けること」といった意義をもち，現在求められる重要な支援の一つとなっている（丸山　2009）。

2008年７月の「障害児支援の見直しに関する検討会報告書」，2008年12月の「社会保障審議会障害者部会報告」のいずれにおいても，学齢期・青年期の障害児支援として，「放課後や夏休みにおける支援（居場所の確保）」の必要性が示されている。そこでは，「（学齢期の）子どもにとっては，放課後や夏休み等の時間を合わせると，学校にいる時間や家庭にいる時間と同じ位になるなど，放課後や夏休み等の対応は重要なもの」（社会保障審議会障害者部会　2008：８）であるとされている。いずれの報告書においても，具体策としては，「放課後型デイサービスの実施」，「放課

後児童クラブ等での障がい児の受け入れの促進」，そのための「障がい児の専門機関の放課後児童クラブ等への巡回支援」などが提言されている。これらの報告は，「障害のある子どもの放課後・休日支援のための国の制度の必要性を認めたものとして重要な意義をもつ」ものであるとも指摘されている（丸山　2009：317）。

こうした「障がいのある子どもの放課後・休日支援」は，1990年頃から取り組まれ始め，今日各地で広がってきているものの，その充実は依然として大きな課題であり続けていると言われる（丸山　2009）。

2007年～2008年には，「障がいのある子どもの放課後・休日支援」の実態把握と，そのあり方を明らかにするための全国調査も実施されている（津止ら　2008；丸山　2009）。それは，学齢期（小１～高３）の障がいのある子どもをもつ保護者，および，市町村自治体を対象とする質問紙調査によって行われた。

保護者調査の結果から，「全体の２割強がいかなる放課後・休日支援も利用していないこと」「利用割合については，地域間・自治体間の差が大きいこと」が明らかとなった。

さらに，課題として，「放課後・休日支援の量的不足」「送迎の負担」「経済的負担」「知識・技能を備えた人材の不足」などが浮かび上がってきた。「長期休暇は予約が続けてとれず，３～４ヶ所をハシゴしている。子どもは混乱するし疲れる」といった保護者の声も紹介されている。

「障がいのある子どもの放課後・休日支援」の充実のためには，こうした広範囲にわたる実態調査とともに，支援実践の事例検討も求められる。なぜなら，「障がいのある子どもの放課後・休日支援」の主体，形態は，放課後児童クラブ，ガイドヘルプ・ホームヘルプ，児童デイサービス，日中一時支援事業，レスパイト事業など，現在極めて多様に存在するからだ。それぞれの事例検討の蓄積も進みつつあるが，「長期休暇支援」についての事例検討は現在まだわずかである（齋藤，木村　1997；藤田　2001；池本ほか　2001；池本ほか　2002；池本ほか　2003；池本ほか　2004；由谷，渡部　2007など）。

以上をふまえて本研究では，「障がいのある子どもの放課後・休日支援」のなかでも，特に「長期休暇支援」に焦点をあて，Ｙ県Ｋ市にある，障がいのある子どもとその母親で構成される母子グループＪで行われている「長期休暇支援」の事例検討を行う。本研究では，これを通して，「障がいのある子どもの長期休暇支援」のあり方の一事例を明示するとともに，こうした形態でなされる場合の特長と課題について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ　研究の方法

１　調査対象　調査対象は，Ｙ県Ｋ市にある，障がいのある子ども11名とその母親11名で構成される母子グループＪ（以下，Ｊ）に所属している母親のうち９名（a～i）と，Ｊの活動にボランティアとして参加しているＺ大学の学生で2008年度の「学生ボランティア代表」を務める２名（j，k）

表１　調査対象者（Ｊに所属する母親９名）の属性

	就業の有無	参加年数	子どもの年齢	子どもの学年	子どもの性別	子どもの障がい	備考
母親ａ	無	１年目	６歳	小１	男	プラダーウィリー症候群	―
母親ｂ	無	１年目	６歳	小１	男	プラダーウィリー症候群	―
母親ｃ	無	２年目	８歳	小３	男	精神運動発達遅滞	―
母親ｄ	有	２年目	13歳	中１	男	自閉症	―
母親ｅ	無	２年目	７歳	小２	男	発達遅滞	―
母親ｆ	無	２年目	８歳	小３	男	自閉症	―
母親ｇ	有	５年目	11歳	小５	女	知的障がい	―
母親ｈ	有	５年目	10歳	小５	男	広範性発達障がい	―
母親ｉ	無	５年目	13歳	中２	男	知的障がい	2006～2008年度代表

※2008年８月時点

の計11名である。母親９名の属性は表１の通りである。なお，母親ｉは，Ｊの2006～2008年度の「代表」である。学生２名はいずれも，障がい児教育を専攻している。

２　**調査時期**　2008年８月。2009年２月～６月。

３　**調査手続き**　2008年８月に調査対象者11名に質問紙を配布した。後日母親分は全て回収したが，学生分は回収することができなかった。

質問紙調査を補うため，2009年２月～６月に，上の９名の母親のうち協力を得られた母親５名（a，b，c，h，i），および，学生２名（j，k）に，半構成的面接法による個別インタビューを実施した。なお，インタビュー調査の協力を得られた母親５名には，Ｊの「代表」であるｉも含まれていた。インタビュー内容は承諾を得てボイスレコーダにて録音し，後日書き起こした。

表２　母親への質問紙項目・主なインタビュー項目

①子どもについて（年齢，性別，Ｊへの参加年数，就学状況，障がい）
②J を知ったきっかけ
③J に参加する前の夏休みの過ごし方
④J に初めて参加した時の気持ち
⑤J に参加するようになって自分自身にとってよかったこと
⑥J の他の保護者と親しくなるきっかけとなったできごとや活動
⑦J に子どもを預けた後の時間の過ごし方
⑧J に参加するようになって子どもにとってよかったこと
⑨J での子どもと他の子や学生ボランティアとの関わりで印象に残っている場面とその時の気持ち
⑩J に参加して悩んだこと，難しいと感じたこと
⑪J の活動・活動日数・活動時間・会場に対する満足感・やってみたい活動
⑫J に対する感想，意見，要望

表３　「学生ボランティア代表」への質問紙項目・主なインタビュー項目

①J に参加する学生ボランティアを募る方法
②J の活動の企画・進行の役割分担
③J へのＺ大学教員の関与
④J に参加する学生ボランティアの属性
⑤J に参加する「学生ボランティア代表」の決定方法
⑥「学生ボランティア代表」になる前のＪへの参加状況
⑦J に初めて参加した時の気持ち
⑧J の母親と親しくなるきっかけとなったできごと
⑨J の活動で工夫したこと
⑩J に参加することで，障がい児教育に関して学べたこと
⑪担当する子どもや母親との関わりで気をつけていること
⑫J に参加して悩んだこと
⑬「学生ボランティア代表」になってよかったこと
⑭J 以外で学生ボランティアとして参加しているサークル
⑮J の活動・活動日数・活動時間・会場に対する満足感・やってみたい活動
⑯J に対する感想，意見，要望

表４　「代表」を務める母親ｉへの主なインタビュー項目

①「代表」になった経緯
②J 設立の経緯
③活動場所の確保
④学生ボランティア依頼の契機
⑤活動の企画・進行
⑥母親同士の連携
⑦行政からの支援

4　調査内容　質問紙項目は，先行研究（由谷ら 2007）で用いられていたものを一部参考にしつつ，作成した（表２，表３）。インタビュー項目は質問紙項目と同一とした。但し，Ｊの「代表」を務める母親ｉには，表４に示す項目についても追加してインタビューを行った。

Ⅲ　研究の結果・考察

1　Ｊの概要　Ｊの「代表」を務める母親ｉへの質問紙・インタビュー調査から明らかとなったＪの概要は以下の通りである。

⑴　Ｊ誕生からこれまでの経緯　誕生は1984年頃で，最初は数名の母親が集まって活動をしていた。当初は年間を通した活動であった。しかし，長期休暇中の活動を主にしたいという母親と，年間を通して活動したいという母親とで意見が分かれた。現在のＪは長期休暇中の活動を主にしたいと考えた母親によって継続されている。その後，Ｋ市障害福祉課から「在宅心身障害児（者）母子グループ指導事業」の委託を受け，委託料として財政的支援を受けるようになった。

さらにその後，母親たちだけの活動では限界があると感じ，ボランティアを募集した。そうして，Ｚ大学の障害児教育コース等の学生数名がボランティアとして毎年度参加するようになった。

⑵　行政からの支援　Ｋ市「在宅心身障害児（者）母子グループ指導事業実施要綱」に基づいて，Ｊは毎年度，Ｋ市から委託料30万円を受け取っている。また，Ｋ市障害福祉課では，Ｊの「代表」から依頼があれば，ＪがＫ市立Ｎ保育所を借りることができるよう，Ｋ市保育課に借用依頼の申請をする。また，Ｙ県立のＤ特別支援学校は，夏季休暇中に在学児童生徒に開放しているプールをＪにも開放している。そのため，Ｊは，Ｄ特別支援学校職員２名のプール監視のもと，プール活動を行うことができている。また，ＪはＫ市立障害福祉センターも利用することができている。Ｊはこれらの施設のいずれも無料で借りることができている。

さらに，Ｊは，Ｙ県社会福祉協議会「Ｔ基金」からの助成金10万円を受け取っている。「Ｔ基金」とは，Ｙ県内において社会福祉事業を行うボランティア団体等の活動を支援するための助成金である。

ＪからＫ市の障害福祉課には，毎年度，年間実施計画，事業実績報告書，収支決算書が提出されている。年度末に提出される事業実績報告書は，活動の様子をうつした写真や，子どもや学生ボランティアの言葉などを掲載した文集形式のものである。

⑶　活動費　活動費は，前述のＫ市障害福祉課からの委託料30万円，Ｙ県社会福祉協議会「Ｔ基金」からの助成金10万円に加え，各母親が年間5,000円納める会費とで構成されている。

前述の全国調査（津止ら　2008；丸山　2009）では，「障がいのある子どもの放課後・休日支援」の課題として，「経済的負担」が指摘されていた。しかしながら，Ｊでは，行政からの財政支援のもと，母親が負担するのは年会費の5,000円のみとなっている。さらに，学生ボランティアの参加により，夏季休暇中は原則として人件費は不要となっている。こうしたことにより，Ｊの経済

表５　Ｊの夏季休暇中の活動形態

活動場所	Ｋ市内のＹ県立Ｄ特別支援学校，Ｋ市障害者支援センター，Ｋ市立Ｎ保育所 ＊Ｄ特別支援学校または障害者支援センターを借りることができなかった場合はＮ保育所で活動する。		
活動日	７月下旬～８月上旬の２週間に週３回ずつ		
活動時間	９：00～16：00		
活動内容	午前	Ｄ特別支援学校でのプール	
	昼食	お弁当（Ｊが購入したもの）	
	午後	Ｄ特別支援学校の場合	色ぬり，カード遊びなど
		Ｎ保育所の場合	散歩やシャボン玉，お絵描きや粘土遊びなど
行事	８月中旬にお泊り遠足（１泊２日のキャンプ），または，日帰り遠足がある。		

的負担は小さくなっている。インタビューでも，経済的負担を課題とする回答は全く認められなかった。これは，Ｊが25年も継続することができている要因の一つであると考えられる。

⑷　**活動形態**　現在，Ｊは夏季休暇中の７月下旬から８月上旬に週３回２週間にわたり活動を行っている（表５）。冬期休暇中の活動は１回のみでクリスマス会が実施されている。

なお，長期休暇期間以外は，年間を通して１，２カ月に１回程度，音楽療法を中心とした活動を行っている。この活動には，音楽療法の専門家が講師として有料（年間10万円）で協力している。

⑸　**組織体制**　Ｊの組織体制は，図１の通りである。Ｊは，前述の通り，Ｋ市内に住む障がいのある子ども11名とその母親11名で構成されている。Ｊの設立運営主体は母親で，活動の企画も母親が行い，活動の準備・進行を母親と学生ボランティア（高校生ボランティアが加わることもある）が協力して行っている。昼食の準備，片付けは母親が担当している。活動中，学生ボランティアはそれぞれ１名の障がい児を担当し，活動の支援を行っている。また，きょうだい児も障がいのある子どもと一緒に参加している。

なお，母親のうち１名がＪの「代表」を務める。「代表」は，原則として，就業しておらず，子どもの年齢も高い母親が務め，２年程度で交代していっている。

親子の参加年数は，通常２～５年程度で，皆子どもが中高校生になる頃には，Ｊを言わば「卒業」していっている。よって表１に見る通り，構成員の約半数の参加年数が１～２年となっている。

また，毎年度，学生ボランティアのうち２名が「学生ボランティア代表」を務めている。「学生ボランティア代表」は原則としてＺ大学の障害児教育コースの２年生が務め，年度の終わりに次年度の２年生２名に引き継がれている。

このようにＪは，「障がいのある子ども・母親・きょうだい児・ボランティアの四者参加型」の形態をとっていることがわかる。これは，Ｊの長期休暇支援活動の大きな特長の一つであると思われる。同時に，Ｊが長年継続することができている要因の一つであると考えられる。

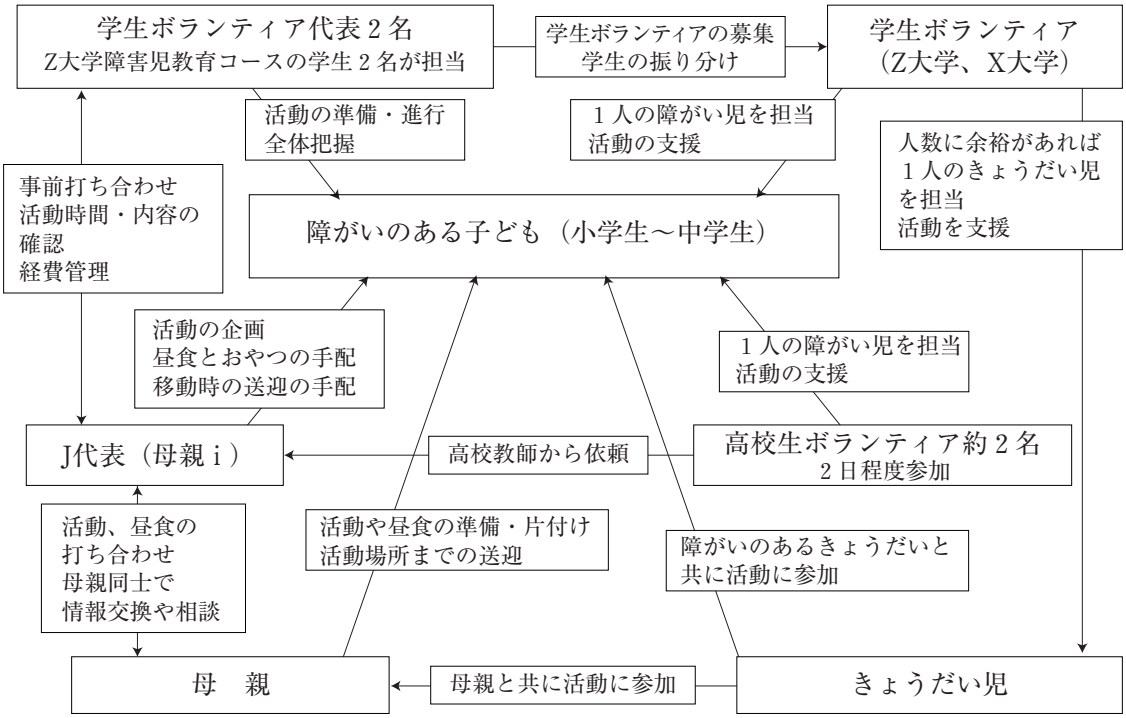

図１　Ｊの組織体制（2008年８月時点）

2　参加者から見たＪの特長　本調査で得られた母親からの回答のうち，Ｊの特長に関わるものを，内容ごとにまとめて表６に示した。回答からは，Ｊの特長として，「子どもが人間関係を広げられる場」「楽しい活動の場・外出しようと思わせてくれる場」「母親同士の交流を深められる場」「母親の休息・育児負担軽減の場」「きょうだい児への子育てを支援してくれる場」といったことが浮かび上がってきた。以下，詳しく回答を見ていきたい。

「子どもが人間関係を広げられる場」に関わる回答としては，「障がい児同士が友達として語り合い，口（言葉）が出なくても目で通じ合える様子などは感動します」といったものが見られた。全国調査（津止ら　2008；丸山　2009）でも，放課後・休日支援の利用目的として，約半数の人が「子どもが友だちや同世代の仲間と過ごすこと」をあげているが，Ｊもそうした機能を果たしていることがわかる。障がいと一言で言っても，障がいの種類や程度はそれぞれであり，子どもの数だけ障がいがあると言っても過言ではない。Ｊは，様々な障がいをもつ子どもたちが集まり共に活動する場である。また，他の子どもの母親，きょうだい児，さらには，学生ボランティアと出会える場でもある。それを支えるのは，「障がいのある子ども・母親・きょうだい児・ボランティアの四者参加型」という形態であろう。特に，学生ボランティアの協力が，子どもたちの豊かな人間関係の広がりを支えていると思われる。

「楽しい活動の場・外出しようと思わせてくれる場」に関わる回答としては，「こういう活動に参加するっていう名目がないと，家に閉じこもりがちになってしまう」「Ｊに出かけるよって言うと，楽しいので，すごく出やすいんです」といったものが見られた。「Ｊに参加する前の夏休みの過ごし方」の回答としては，「家族で旅行に行った。あとは家できょうだいと一緒にテレビを見たりした」「家のなかで，本人の好きな遊びをさせていました」といったものが見られた。障がいのある子どもを連れての外出は負担も大きく，どうしても家にこもりがちになってしまう。全国調査（津止ら　2008；丸山　2009）でも，放課後・休日支援の利用目的として，半数以上の人が「家に居るばかりにならないよう，子どもの外出の機会をつくること」をあげている。本調査の回答から，Ｊがこうした機能を果たしていることがわかった。と同時に，こうした機能の重要性が再確認されたと言える。Ｊのそれを支えているものとしては，学生ボランティアの協力も大きいが，Ｙ県立のＤ特別支援学校が在学児童生徒を対象に開放しているプールをＪにも開放しているなど，施設利用における行政からの支援も大きいと思われる。「活動場所」についての質問でも，全員が「ちょうどよい」と回答しており，その満足度は高かった。

「母親同士の交流の深まり」に関わる回答としては，「キャンプなどで，親も協力して一緒に活動する時間が長くなると，話をする機会が増える。先輩のお母さんの話をきいてとても勉強になり，子どものことを前向きに考えられるようになりました」といったものが見られた。全国調査（津止ら　2008；丸山　2009）では，放課後・休日支援の利用目的として「母親同士の交流を深めること」をあげている人は全体の１割にも満たないが，Ｊでは逆にこのことが特長となっている。それはＪが子どもを預ける場でなく，原則として母親も共に活動に参加する場であるからだろう。Ｊでは母親が協力して活動や昼食の準備や片付けなどを行う。それらは一見すると母親の負担であるが，反面，母親同士が自然に会話をもてる機会となっている。さらにＪでは，１人の子どもに対し１人の学生ボランティアが専属でつく。母親の目の届くところで，学生ボランティアが子どもと楽しそうに遊んでくれるので，母親は安心して悩みを相談し合うこともできるのである。

「母親の休息・育児負担軽減の場」に関わる回答としては，「子どもと１対１になる時間が少なくて解放される」「（学生ボランティアの方に）お任せしてしまっても平気だったので，これは有難いなと思っていました」といったものが見られた。全国調査（津止ら　2008；丸山　2009）でも，放課後・休日支援の利用目的として「保護者のレスパイト（休息・介護負担軽減）」を約４割の人があげているが，Ｊもこうした機能を果たしていることがわかる。長期休暇になると母親と子どもが共に過ごす時間は大幅に増加し，育児負担

は増大すると推察される。Jでは原則として母親も子どもと共に活動に参加するが，学生ボランティアの協力により，母親が子どもにつきっきりになる必要はなく，他の母親と会話を楽しむこともできる。また，必要な場合には子どもをJに預けてその時間に用事を済ませて来るといったことも可能となっている。

「きょうだい児の子育てを支援してくれる場」に関わる回答としては，「妹もお姉ちゃんも参加できて，……妹のほうが楽しいのかななんて思うくらい。本当によかったと思います」「(家で上の子を）心おきなく勉強に集中させられる」といったものが見られた。全国調査（津止ら　2008；丸山　2009）でも，数は少ないながら，放課後・休日支援の利用目的としていわゆる「きょうだい児のため」といった回答が認められているが，Jもこうした機能を果たしていることがわかる。それを支えているものの一つは，「きょうだい児も参加できる」というJの形態であろう。また，学生ボランティアの協力のもと，必要な場合には子どもをJに預けることが可能になっている点もあげられる。実際，その時間の活用方法に関する回答では，「上の子どもの勉強を見る」といったものも見られた。

表6　Jの特長に関わる母親からの回答

子どもが人間関係を広げられる場	母親a	そういう（＝異年齢の子どもと関わる）機会が少ないというか。だから，そういう（＝異年齢の子どもと関われる）ところで，違う年の人と一緒に関われることっていうのは貴重なことかなと思って。
	母親b	お葉書を書きましょうっていうのがあったんですよね，活動で。それで，（○○さんに）渡してて。お姉さんっていうか，好きなお友達ができてよかったなって思いました。
	母親b	大きいお兄ちゃんやお姉ちゃんたちがいて，やはり小学校にはいなくて，それがとても嬉しかったみたいで。学生さんたちが関わって，たくさん関わって下さるので，本人はとても嬉しいというか，楽しいというか。
	母親e	友達とのコミュニケーションが上手くいかず，ケンカになりながらも，仲直りをでき，その後，楽しく遊べているのを見れて，よかったです。少しずつでも「友達への思いやり」を勉強できればと思いました。
	母親g	障がい児同士が友達として語り合い，口（＝言葉）が出なくても目で通じ合える様子などは感動します。
	母親b	サマーランド（＝Jの遠足）に行った時に，○○には1人お姉さんがついてやっていてくれて。2人きりで楽しくやってたんだなっていう話を聞いたので，誰かついててくれれば，私と離れても行動できるんだなっていうことが印象に残っています。
	母親c	道路を歩いていても，知らない人に，どっか一緒に行こうとかというようなことを話しかけてしまうことがあって，そういうことが大っぴらにできる場であったっていうことが，ほっとして。お兄さんたちと心おきなく本人が遊べるっていうのが，すごくよかったなって思いました。
	母親f	（学生ボランティアの方が）反応のない我が子にずっと笑顔で，また我が子の気持ちを理解しようと一生懸命に接して下さって，本当に有難く，また，母自身も日々の生活に追われ，こんなにもゆっくりゆったりと接してあげていなかったなという反省点も見えた。
	母親i	何年か見て下さっていると，子どもの成長をよく見て下さっていて，家にいる家族よりもわかって下さったりすることがある。すごくきめ細やかに助けて下さってると思います。有難いです。
	母親c	Jに参加する前に，U立のリハ（＝リハビリ）系で，G教室っていうのがあって，そちらにやっぱり学生さんが来てくれて。小学校入学と同時に，そのG教室っていうのが卒業になってしまうので，なのでG教室と同じに通える所があって，すごくよかったなっていうふうに感じました。
	母親d	前のグループがレベルが高く，作業が中心だったので，正直しんどかったのですが，Jは開放的な雰囲気で，楽しめる感じだったので，ほっとしました。

楽しい活動の場・外出しようと思わせてくれる場	母親 a	会場，人の手配など大変かと思いますが，今後もずっとずっと続けて行ってほしい活動です。D（特別）支援学校は大変よい場所だと思いました。
	母親 b	D（特別支援学校）自体にも行くことってそんなにない。プールも J に入ってなければ，D（特別支援学校）のプールなんて使わせていただけないので，すごくそれはよいことですね。
	母親 g	J の活動は，子どもや親を通して行きたい場所等を聞き，バス等を貸切にして遠くへ出かける。
	母親 c	正直言って，やっぱり子ども連れて行き帰りするっていうのが，J のほうもちょっときついと言えばきついんですけども，でもやっぱり子どものためにはなってるなっていうことと，こういう活動に参加するっていう名目がないと，家に閉じこもりがちになってしまうので，やっぱりその辺がよかったかなって思ってます。
	母親 f	（母親にとってよかったことは）長い夏休みの居場所ができたこと。
	母親 i	J に出かけるよって言うと，楽しいので，すごく出やすいんです。行くことに関してはそんなに億劫ではないんです。
	母親 b	どっか行くって，なかなか行けないんですけど，D（特別支援学校）のプールはわりと（行ける）。子ども用のプールもあったし，とても入りやすくってよかったです。
母親同士の交流を深められる場	母親 a	学校での様子だとか，学校によって支援学級のあり方とか進め方とか……違うっていうのは話をしたりとかで感じましたね。子どものこだわりだったりとか困った問題だとかを話すと，（他のお母さんに）アドバイス的に言ってもらったりする。
	母親 f	キャンプなどで，親も協力して一緒に活動する時間が長くなると，話をする機会が増える。先輩のお母さんの話をきいてとても勉強になり，子どものことを前向きに考えられるようになりました。
	母親 i	子ども同士のトラブルだったりとか，それ（＝トラブルのなか）でうちの子はこうだよってことで深く話せるんです。こういうふうにしていったらいいよとか，こういうところを注意してよとか，トラブルから仲よくなっていくというところがあったように思うんです。1 日を通して見れると，こんなことがあるんだ，あんなことがあるんだっていうことで（理解できる）。
母親の休息・育児負担軽減の場	母親 h	子どもと 1 対 1 になる時間が少なくて解放される。他のお母さんと話ができて発散できる。子どもがプールで楽しそうにしていると，親もうれしい。
	母親 a	（子どもを預けられて）私は助かったので。その（＝助かったという気持ちの）ほうが大きかったかもしれない。
	母親 h	開放的な気分。心配，もちろんあるさ。まあ，2，3 時間だからね。この（＝子どもを預けた）時間をどうやって有効に過ごそうかっていうことのほうが（考える）。まあ，プールは預けられる。プールは好きだからね。
	母親 c	もっと親も関わらないといけないような気もしてたんですけど，わりと放っておいても，（学生ボランティアの方に）お任せしてしまっても平気だったので，これは有難いなと思っていました。
きょうだい児の子育てを支援してくれる場	母親 c	家の仕事ができるかなっていうのはあります。（家に）いても（家事）やってる時はやってるし，（家事を）やらない時はやらないんですけれども。あと上の子たちが休みの時に勉強をしなかったりするのを集中的に管理できるっていうか，○○のことを気づかわずに（上の子たちが勉強）できる。やっぱり，（○○は）お姉ちゃんたちがいると遊びたくなっちゃうので，○○が邪魔をするっていうか，そういうところがあるので，（家で上の子を）心おきなく勉強に集中させられるっていうところがよかったです。
	母親 h	きょうだいも楽しく参加している。
	母親 i	妹もお姉ちゃんも参加できて，今も妹が参加させていただいてもらってるので，妹のほうが楽しいのかななんて思うくらい。本当によかったと思います。

（＝　　）：筆者の言い換え　（　　）：筆者の補足

本研究では，前述の通り，Ｊの活動に参加している学生ボランティアのうち「学生ボランティア代表」の２名にもインタビューを実施した。そこで得られた回答のうち，Ｊの特長に関わるものを，内容ごとにまとめて表７に示した。回答からは，障がい児教育を専攻する彼らにとって，Ｊは「障がい児への理解が深まる場」「障がい児の家族への理解が深まる場」として機能していることがうかがわれた。

「障がい児への理解が深まる場」に関わる回答としては，「それぞれに特徴があって，みんな違う」「自分の決めつけみたいなのが，……そうじゃないんだなっていうことがＪでもあった」「対応に困る時とか……お母さんが出て来て，『○○はこうなんですよ』みたいな感じで教えてくれた」といったものが見られた。さまざまな障がい児と出会い，１対１で関わり，困惑や戸惑いなどを経験するなかで，障がいのある子どもについての考え，彼らへの関わり方についての考えが揺さぶられ深まっている様子がうかがわれる。

「障がい児の家族への理解が深まる場」に関わる回答としては，「お母さんたちがこういうことを考えてるとか，こういうこと勉強しながら子育てしてるっていうことを知れた」「きょうだいの子がお兄ちゃんの障がいのことをどう思っているのかとか，関わり方が温かいなっていうのを見れたり」といったものが見られた。こうした回答からは，学生ボランティアにとってＪが，障がい児をもつ母親についてはもちろん，きょうだい児についても理解を深められる貴重な学びの場となっていることがうかがわれる。母親やきょうだい児が障がいのある子どものことをどのように思っているのか，これまでどのような子育てをしてきたのか，障がいのある子どもが学校や家庭でどのような生活を送っているのかなど，母親から話してもらえることで，学生ボランティアは障がいのある子どもについて，さらには，障がいのある子どもの母親やきょうだい児について理解を深めていくことができるのである。障がい児から，障がい児の家族へと，視野が広がっていく様子がうかがわれる。

表７　Ｊの特長に関わる「学生ボランティア代表」からの回答

障がい児への理解が深まる場	学生ｊ	子どもは１人１人違うから，一概には言えないんですけど，Ｊで見た子どもたちみたいに，他の学校とか実習に行っても，それぞれに特徴があって，みんな違うっていうのが（ある）。Ｊを見ててそう感じた気持ちのまま実習とかでも子どもを見れるので。こうやったから，こう思ってるんだろうっていう自分の決めつけみたいなのが，１回間違えたりして，そうじゃないんだなっていうことがＪでもあったので，それを実習でも活かせるというか。子どもたちの見方とかが，自分のなかでいろいろなパターンというか，１個に決め付けないでやるようになれたっていうのがあったかなと思います。
	学生ｋ	お母さんたちと話すようになったのは代表になってからかも。なんか，ちゃんとしゃべるようになったのはそういう感じで。○○くんとか○○ちゃんとかはわかんないっていうか，対応に困る時とか，○○くんなんか外に出ちゃったとかする時なんかはお母さんが出て来て，「○○はこうなんですよ」みたいな感じで教えてくれた時に，「ああ，そうなんですか。さっきも，こういうことしてました」みたいな感じで言うと，普段の様子を教えてくれたりっていうのはありました。
障がい児の家族への理解が深まる場	学生ｊ	お母さんたちと話すことって普段ないから，子どもと関わることはあっても，お母さんと関わることはなかったから，お母さんたちがこういうことを考えてるとか，こういうこと勉強しながら子育てしてるっていうことを知れたのは，すごい今後につながるっていう感じで，勉強になるなって感じました。
	学生ｋ	お母さんが勉強してるって聞いて，すごいなって思うのと，私たちが毎日関われるわけじゃないから，月１とか夏休みも何週間とかぐらいですけど，その関わりですごい頑張ってもやっぱりお母さんには到底及ばないし，お母さんの関わりを見てて，こうすればよいんだっていうのを思うことが学べたっていうのと。あとはきょうだいの子の関わりとか，きょうだいの子がお兄ちゃんの障がいのことをどう思ってるのかとか，関わり方が温かいなっていうのを見れたりとか，そういう部分で，その障がいのある子だけじゃなくて，周りの人の様子が見られたのが，学校とかと違ってよかったなと（思います）。

（　　）：筆者の補足

3　参加者から見たＪの課題　次に，本調査で得られた母親および「学生ボランティア代表」からの回答のうち，Ｊの課題に関わるものを内容ごとにまとめて表８に示した。回答からは，Ｊの課題として，「活動内容の一層の充実」「ボランティアの不足」「母親の負担軽減の場としての一層の充実」「送迎負担」「活動の普及」「子ども同士の交流の場としての一層の充実」といったことが浮かび上がってきた。

前述の通り，全国調査（津止ら　2008；丸山　2009）では，「放課後・休日支援の量的不足」「送迎の負担」「経済的負担」「知識・技能を備えた人材の不足」などが，「障がいのある子どもの放課後・休日支援」の課題となっていることが明らかにされている。

今回の調査では，Ｊの「活動日数・活動時間」について８割の母親が「ちょうどよい」と回答しており，その点での不満はみとめられなかった。また，「経済的負担」を課題とする回答も全く認められなかった。しかしながら，「送迎負担」や「人材」の問題など，全国と傾向を同じくする課題も認められた。さらに，Ｊ独自の課題も認められた。

「活動内容の一層の充実」に関わる回答としては，「専門の先生や指導者が必要で，内容のなかで療育的なことを増やしていきたい」「ちょっと近くの公園に行って遊ぶとか。許されるなら公共の乗り物を使って行ければ，動物園とか」「年齢が大きくなるにつれ障がいの程度が差があり，大きくになるにつれＪを離れていく」「中学生になって（もう）２年生です。……そろそろどう活動するか，悩みます」といった回答が見られた。

前節で見てきた通り，「楽しい活動の場」であることはＪの特長の一つである。しかしながら，母親たちからは，「専門家による療育活動の導入」や，「施設外での活動の一層の充実」，「年齢があがっても参加できるよう活動内容を工夫すること」や，「障がいの違いに配慮された活動の一層の充実」などが求められていることがわかった。こうした課題には，やはり専門家による支援が必要なのではないかと思われる。

「ボランティアの不足」に関わる回答としては「(学生）ボランティアさんが夏休み前半がわりと学校があって来られない」「学生の方々のテストや補講のある時期にプール開放されている」といったものが見られた。子どもの夏休みと学生ボランティアの夏休みの時期がずれるため，活動期間の前半は学生ボランティアが不足しやすい状況にあることがわかる。そしてこの時期には特に母親の負担が増すことが推察される。ボランティアの存在は，Ｊの様々な特長を支える重要なものである。ボランティアを学生に限らず，より広く求めていくことはできないだろうか。

「母親の負担軽減の場としての一層の充実」に関わる回答としては，「当番を決めて，この日はこのお母さんが出てっていうような，そういうシステムを……つくっていけたらよいかな……毎回毎回，一緒について行くんだと，厳しいものがあるので」といったものが見られた。母親参加型を維持しながら，母親負担をいかに軽減させていくか，当番制の導入が模索されていることがうかがわれた。

「送迎負担」に関わる回答としては，「ちょっと遠いかなっていう気はします」「送り迎え……が思ったよりたいへんだった」といったものが見られた。ＪはＫ市内の在宅心身障がい児母子から構成されているため，送迎負担は他の場合に比べれば少ないのではないかと推察されるものの，こうした回答も見られた。それぞれの地域で，各家庭のごく身近な場所で，Ｊのような活動が展開されていくことの重要性がうかがわれた。

「活動の普及」に関わる回答としては，「もっと大勢の人にＪの活動を知ってもらって参加してもらってと思っています」「なるべく私も新しいお母さんをスカウトして。障がいをもっている子の親って……いろんな所でいろんな会を連立していて，その会同士の横のつながりっていうのが全然なくって」といったものが見られた。現時点でＪは，母親が友人や知人を誘って来ることで広がっているようである。より多くの人に知ってもらうためには，回答にもあるように，障がいのある子どもの保護者がつくる会の横のつながりが重要であろう。また，行政のホームページなどを活用して，広く情報発信することも有効であろう。Ｋ市の委託事業であることを考えれば，Ｋ市が広報活動に積極的に支援することも必要ではないだろう

か。

「子ども同士の交流の一層の充実」に関わる回答としては，「お兄ちゃんとかお姉さんとか，かまってくれる……ほうに行っちゃって，お友達と一緒にっていうことがなかなかできないこともありました」「（学生）ボランティアさんが少ない時は他のお友達と関わることが多かったのですが，（学生）ボランティアさんがたくさんになると，（学生）ボランティアさんとだけ過ごす時間が多くなってしまった」といったものが見られた。前節で見てきた通り，「障がいのある子ども同士が出会い交流できる場」であること，「子どもが人間関係を広げられる場」であることは，Ｊの大きな特長の一つである。また，１人の学生ボランティアが１人の障がい児を担当するという形態も，「母親同士の交流の深まり」や，「母親の休息」を可能とする重要なものである。しかしながら，上の回答からは，場合によっては，学生ボランティアと子どもとの１対１の関わりが，子ども同士の交流の機会を減らしてしまうこともあるのがうかがわれた。今後，学生ボランティアが，子ども同士の関係をつなぐ役割をも意識的に担っていく必要があると思われる。

表８　Ｊの課題に関わる母親・「学生ボランティア代表」からの回答

活動内容の一層の充実（専門家による療育活動の導入）	母親ｆ	（今後やってみたい活動は）体育，体操教室的（なもの）。ex．マット運動，縄を使った動き，手押車など体力増進的なもの。
	母親ｉ	専門の先生や指導者が必要で，内容のなかで療育的なことを増やしていきたい。音楽療法や歌や運動についても，しっかり指導して下さる方が必要であると考えます。母親たちには指導できないことばかりですので，プール以外の活動に（学生）ボランティアさんの意見や新しい知識を取り入れることも必要と考えられます。
	母親ｉ（代表）	私自身それ（＝専門家からの助言）をちょっと引っ張ってくることがなかなかできなくて，余裕がなかったと思うんですよね。私としては知識もなくて，こういう知り合いが，こういう先生がいて，こういう活動をしているからＪにもって来てということは，なかなかなくて。専門的な療育が欠けてて，悪いなと思ったんですけど。
活動内容の一層の充実（施設外での活動の一層の充実）	母親ｂ	馬が大好きなんです，うちの子は。だから，（今後やってみたい活動に）これ（＝乗馬）を書きました。川遊びっていうのは（書いたのが）夏だったから。これ（＝アンケートを）書いたのが夏だったから，川遊びとかすごい好きでよいかなって思って書いたと思います。
	母親ｄ	今年はまだ行ってないのでわかりませんが，日帰りバスツアーを恒例にしてほしいです。多分，楽しいと思うので…。
	母親ｈ	自分の子はお出かけみたいなことが（好きです）。ここにじっとしてて，これをするっていうのが苦手だから，Ｄ（特別支援学校）の何とかホール（＝多目的ホールや視聴覚室）とかだけじゃなくて，ちょっと近くの公園に行って遊ぶとか。許されるなら公共の乗り物を使って行ければ，動物園とか（行きたいです）。
	学生ｊ	（他のサークルと比べると）Ｊが一番（遠くへ）出かけないかも，最近は。
活動内容の充実（個々に合わせた活動の一層の充実）	母親ｅ	（Ｊに参加しての悩みは）会話ができるのに，必要な言葉，貸して，どいて，やめてや，あいさつ，ごめんなさい，ありがとうが言えないので，友だちとケンカになってしまうこと。まだ，１人で預けるのは難しいと感じました。
	学生ｊ	○○くんとか○○くんとか，本当困らないんですけど，○○くんとかはしゃべるけど，逆に消極的っていうか，周りがわぁーってなってると，自分はなんかできないみたいな，「しゅん」（＝落ち込む）みたいなのが見えたりとかすると。程度がすごい違うので，１人１人の。一つの活動をやらせるっていうのが難しいなって思ったりもします。
	母親ｇ	（Ｊに参加しての悩みは）年齢が大きくなるにつれ障がいの程度に差があり，大きくなるにつれＪを離れていくこと。
	母親ｉ	いよいよ中学生になって（もう）２年生です。社会に出ていくのが近くなってきました。参加するのはよいと思うのです。そろそろ小学生が多くなり，どう活動するか，悩みます。
	母親ｂ	（子どもを預けようとしたが）日数とか，（学生）ボランティアさんが夏休み前半がわりと学校があって来られないっていうことがある。

ボランティアの不足	母親 f	学生の方々のテストや補講のある時期にプール開放されているということもありますが，今年は参加していただける方が少なかったように思います。
	母親 h	前にもふれましたが，（学生）ボランティアさんが年々少なくなってきていて，母親の負担が多くなってきています。
	母親 i（代表）	（学生）ボランティアさんの方との関わりは，私が話をしているんですけど，なかなかお会いする時間とかがなくて。活動の後の反省会をもったほうがいいなって思ってるところなんです。
母親の負担軽減の場としての一層の充実	母親 c	大勢のお母さんが，大勢のお子さんが参加してくれて，お母さんたちが交代で，当番を決めて，この日はこのお母さんが出てっていうような，そういうシステムっていうか，そういう流れをつくっていけたらよいかなっていう（ふうに思っている）。毎回毎回，一緒について行くんだと，厳しいものがあるので。
	母親 i（代表）	日数的に，今日はお当番で，お母さんは今日，この日は○○さんのお母さんがお当番，っていうふうに決めていっていいものか。そうして（＝当番を決めて）いかないと，お母さんたちも毎日出るってこと，毎日というか開催されている日は毎回出るってことも大変だし，ご用もあり用事もある時もあるだろうし。来年からはそういうところ（＝当番を決めること）を（考えていきたい）。お母さんたちの負担を少しね。本当に学生さんによければ，（学生）ボランティアさんにお任せして，お母さんたちはちょっと離れてね，子どもと活動できるようなふうにしたいかなって。
	母親 i（代表）	「子どもが今日は絶対に出れるから，今日は，じゃ，お当番で」って言っても，その（＝当番の）日になって子どもが行けなかったりしたらお休みになっちゃうじゃないですか。そこのフォローをしていくことはしなきゃいけないので，その日のお当番を決めて行くってことがお母さんたちの負担になるとなぁっていうふうに思っています。
送迎負担	母親 c	ちょっと遠いかなっていう気はします。去年は D（特別支援学校）の活動が多くて，D（特別支援学校）でやらせていただくと，近いっていうか，N 保育所よりも近いので，その点すごい楽だったです。
	母親 c	送り迎え，送り出す準備（＝着替，荷物）が思ったよりたいへんだった。
活動の普及	母親 a	学生さんのボランティアだとか，行政の，市の障害福祉課の，そういう行政の助けというか，そういうもの（＝行政の助け）を多くというか全面に出て来てくれると，（J みたいな活動も）やりやすいかなっていうのはあるかと思います。
	母親 c	参加しているお母さんたちが，「こういう活動があるんだよ」っていうことを，知っているお母さんに紹介したりとか話をして。「こんな楽しいことがあったよ」とかっていうことを，どんどん伝えていけたらいいんじゃないかなって思います。なるべく私も新しいお母さんをスカウトして。障がいをもっている子の親っていうのが皆，いろんな所でいろんな会を連立していて，その会同士の横のつながりっていうのが全然なくって。皆，知り合いになれるといいなっていうのがあって，なので，もっと大勢の人に J の活動を知ってもらって参加してもらってと思ってます。
子ども同士の交流の場としての一層の充実	母親 b	お兄ちゃんお姉ちゃん（＝学生ボランティア）だけになっちゃうっていうことがあって，それはそれでよいかなと思うのですけれど，どうなんでしょう。うちの子なんか，自分がわかってもらえる人のほうに行っちゃうことが多いので，お兄さんとかお姉さんとか，かまってくれる，そっちほうに行っちゃって，お友達と一緒にっていうことがなかなかできないこともありました。
	母親 b	（J に参加しての悩みは）学生ボランティアさんが少ない時は他のお友達と関わることが多かったのですが，（学生）ボランティアさんがたくさんになると，（学生）ボランティアさんとだけすごす時間が多くなってしまったこと。

（＝　　）：筆者の言い換え　（　　）：筆者の補足

Ⅳ　総合考察

1　Jの活動の継続を可能としているものについて

一般的に，母親主体のＪのようなグループが長年続くことは困難であると思われる。しかし，Ｊの活動はその誕生から25年にもわたって続けられている。それを可能としているものは何か。第一にあげられるのは，行政からの支援である。Ｋ市からの委託事業として行われているため，母親の経済的負担も小さいものとなっている。また，施設利用においても，Ｋ市，Ｙ県立のＤ特別支援学校からの支援は大きい。また，Ｊの「代表」が，Ｋ市障害福祉課に毎年度末に提出する事業実績報告書も，活動の様子をうつした写真や，子どもや学生ボランティアの言葉などを掲載した文集形式のもので，負担の大きいものとはなっていない。

第二にあげられるのは，組織体制である。Ｊは「障がいのある子ども・母親・きょうだい児・ボランティアの四者参加型」という形態をとっている。障がい児教育を専攻する学生がボランティアとして参加していることは，Ｊの様々な特長の基盤となっている。毎年度必ず，Ｚ大学の障害児教育コースの２年生２名が「学生ボランティア代表」を務めるなど，教員養成校であるＺ大学の障害児教育コースとの連携は，Ｊ存続の要因の一つであると思われる。また，母親から選ばれるＪの「代表」も「学生ボランティア代表」も，その任期が１～２年であることで，ある一部のメンバーに長期間にわたって負担が集中するといった状況も避けられている。これもＪ存続に有効に機能していると思われる。

2　障がいのある子どもにとって　障がいのある子どもにとってＪは，自分以外の障がいをもった子ども，その母親，きょうだい児，さらには，学生ボランティアなど，「家族以外の第三者と人間関係を広げられる場」となっていた。Ｄ特別支援学校のプールを借りての活動や，遠足といった行事など，障がいのある子どもにとって，「楽しい活動の場」となっていることもうかがわれた。

しかしながら，母親からは，「専門家による療育活動の導入」や，「施設外での活動の一層の充実」，「年齢があがっても参加できる活動の工夫」，「障がいの違いに配慮された活動の一層の充実」などが求められていた。これらには，専門家からの支援が必要であると思われる。

3　母親・きょうだい児にとって　母親にとってＪは，共に活動に参加するなかで，「母親同士の交流を深められる場」となっていた。さらに，学生ボランティアが子どもと遊んでくれるため，「休息・育児負担軽減の場」ともなっていた。Ｊは，家に引きこもりがちな長期休暇中に，母親が子どもたちを連れて「楽しく外出できる先」，家以外の居場所ともなっていた。きょうだい児も一緒に楽しく参加できることで，より外出しやすい環境がつくり出されていた。また時には，障がいのある子をＪに預けて，母親がきょうだい児のために時間をつくることも可能となっていた。これらにより，「母親のきょうだい児に対する子育てへの支援」という機能も果たしていることがうかがわれた。さらに，行政からの支援を受けているため，母親の経済的負担は最小限に抑えられていた。

しかしながら，「ボランティアが不足してしまう時期があること」，その時期の母親負担の増加，また「送迎負担」，「活動の普及」などが課題となっていた。また，母親参加型を維持しながら，母親負担をいかに一層軽減させていくか，「当番制の導入」等が模索されていた。「ボランティア」の不足については，ボランティアを学生に限らず求めていくことが有効でないだろうか。また，「活動の普及」については，行政のホームページの活用や，委託事業として行政が積極的に広報の支援をしていくことも必要ではないかと思われる。

4　学生ボランティアにとって　学生ボランティアにとってＪは，「障がい児およびその家族への理解が深まる貴重な学びの場」となっていた。

一方で，学生ボランティアと子どもとの１対１の関わりが，子ども同士の交流を減少させてしまう場合もあることがうかがわれた。今後，学生ボランティアが，子ども同士の関係をつなぐ役割も意識的に担っていく必要があることが示唆されたと言える。

5　最後に　以上，Ｊの事例検討を通して，行政の支援を受けながら，母親たちが主体となって，「障がいのある子ども・母親・きょうだい児・ボ

ランティアの四者参加型」で進めていくＪのような長期休暇支援活動がもつ有効性や可能性，課題を具体的に示すことができたのではないかと思われる。本研究を通して，「障がいのある子どもの長期休暇支援」の必要性・重要性が改めて再確認されたように思う。

＜引用・参考文献＞

・池本喜代正・倉持純子・池本真佐子　2001「知的障害児のサマースクールに関する一考察―実施内容とその教育的意義―」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』24　172－185.

・池本喜代正・中村尚子・池本真佐子　2002「知的障害児のサマースクールに関する一考察（その２）―ボランティアとその保護者の関わりへの意識を中心に―」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』25　169－179.

・池本喜代正・小関幸代・田中宏美・橋本真知子・池本真佐子　2003「知的障害児のサマースクールに関する一考察（その３）―活動内容と指導に関するケース研究を中心に―」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』26　227－237.

・池本喜代正・中村尚子・大金律子　2004「知的障害児のサマースクールに関する一考察（その４）―運営体制を中心に―」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』27　313－321.

・齋藤宇開・木村健一郎　1997「障害児のための「サマースクール」に関する実践的研究⑴：その背景と展望」『北海道教育大学函館学校教育学会年会発表論文集』３　47－48.

・齋藤宇開・木村健一郎　1997「障害児のための「サマースクール」に関する実践的研究⑵：実践に至る経緯と実施計画」『北海道教育大学函館学校教育学会年会発表論文集』３　49－52.

・障害児支援の見直しに関する検討会　2008「障害児支援の見直しに関する検討会報告書」
（http：//www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/dl/s0722-5 a.pdf）

・社会保障審議会障害者部会　2008「社会保障審議会障害者部会報告」
（http：//www.mhlw.go.jp/shingi/2008/12/dl/s1216-5 a.pdf）

・津止正敏・津村恵子・丸山啓史編　2008『障害児の放課後支援の今とこれから―全国調査（自治体調査・保護者調査）報告書―』立命館大学人間研究所.

・藤田久美　2001「発達障害児の地域生活支援システムの作り―山口市における長期休暇と放課後の支援の取り組みの実践報告―」『山口短期大学研究紀要』23　67－73.

・由谷るみ子・渡部匡隆　2007「知的障害養護学校における夏季休業中の余暇支援に関する検討―保護者へのニーズ調査と余暇支援活動の事後評価から―」『特殊教育学研究』45⑷　195－203.

・丸山啓史　2009「障害のある子どもの放課後・休日支援の現状と課題―保護者対象全国調査より―」『障害者問題研究』36⑷　312－319.

【付記】
本論文は，平成21年度大学評価・学位授与機構提出論文に，加筆・修正を行ったものである。